

メッセージアウトライン マタイの福音書8：18～22 「人の思いを知るイエス」

[18]「さて、イエスは群衆が自分の周りにいるのを見て、弟子たちに向こう岸に渡るように命じられた」

イエスは弟子たちや群衆に山上で多くの教えを語られ、その説教を終えて山から下りて来られてなされたことは、ツァラアトに冒された人の癒し、ローマの百人隊長のしもべの中風のいやし、安息日にはユダヤ人の会堂に入られて礼拝を守られ、その後にカペナウムの地で滞在していたシモン・ペテロの家に入られて、高熱に冒されていたシモン・ペテロの姑の病を癒し、安息日の終わったその夜、彼のもとに連れて来られた多くの病人の病を癒し、悪霊につかれた人々からは悪霊どもを追い出された。イエスご自身、ここに至るまでの多くの働きにより疲れておられたであろうが、それにもかかわらずご自分のことをも顧みず多くの人々に愛とあわれみと神の御子としての権威をもって臨まれた。マタイは、イエスのこのような働きこそ、預言者イザヤを通して語られた「彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った(イザヤ53:4)」とのことばが成就するためであったと明確に記している。またこのイザヤのことばには、イエスこそ私たち人間の死に至る病である罪の贖いのためにその罪をご自身の身に負って十字架にかかれる世の救い主の姿も示されているのである。

「さて、群衆が自分の周りにいるのを見て」とは自分の病の癒しのためではなく超人的な力を持つイエスという人物を一目見たい、その話を聞きたいという人々が押しかけて来ていたのであろう。しかし、ここに至るまでの働きでイエスも弟子たちも休息の時が必要であった。それで、群衆からいったん離れて、休息のために船に乗ってガリラヤ湖の向こう岸に渡るようにイエスは弟子たちに命じられたのである。

[19-20]「そこに一人の律法学者が来て言った。『先生。あなたがどこに行かれても、私はついて行きます。』」イエスは彼に言われた。『狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところありません。』」

イエスと弟子たちが舟に乗る前に一人の律法学者が来て、イエスがどこに行かれても、私はついて行きますと言った。彼はイエスの言動に感激してこのように、イエスの行かれるところならどこまでもと自分の決意を表明したのであろう。しかし、彼は律法に通じ、律法を教える教師であり、パリサイ

人たちと組んでイエスを非難攻撃する側から出て来た人物であった。そして彼はイエスに対して「先生」と呼びかけたが、それは原語では「ラビ」であり、ユダヤで尊ばれる称号で自分より目上で、力があり、能力があり、尊敬されるべき教師であることを意味する称号である。

彼の表明は立派なもので、イエスがどこに行かれても、無条件について行くと言う。しかし、「先生」という呼び方からも分かるように、山上の説教を権威をもって語った教師、奇跡を行う偉大な人物としての理解であって、決して「主(神)」としてのイエスではなかった。

20節の彼に対するイエスのことばは彼の熱心に水を差すような答えであった。なぜか。

彼は律法学者であった。つまり旧約聖書の専門家であり、天地創造のこと、人間の墮落のこと、罪のこと、救い主が来て罪人を救ってくださることなどは知っているはずである。その彼が、最近目覚ましい働きをされているイエスという人物の奇跡や教えを単に学問上の興味で追及する姿勢が、イエスにはありありと分かったのであろう。彼はイエスにつき従い、その人となり、言動、力あるわざなどを観察し、ラビとなるための博士論文でも書き上げようとしたのであろうか。彼はイエスの行くところならどこへでもついて行くと言った。しかし、いったい彼はどのような場所を想定したのだろうか。イエスの世の救い主としての重い働きや受けるべき患難、苦しみなどについての十分な理解もなしに、どこにでもついて行くと言い切ったその自信過剰こそ律法学者としての彼の最大の問題であった。彼は自分の今までの生活と思想に何の変化も悔い改めも起こさないで、キリストに従うには、自分のちょっとした決意だけで事足りると考えていたのではないか。

そのような彼に対して、イエスはご自分に従うためにはどれほどの厳しさや自己犠牲が必要であるかということを「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところありません」とのことばで教えられた。

ここでいう「人の子」とはここで初めて出てくる言葉であるが、福音書の中でイエスはこの言葉を、ご自分を指すものとして特に好んで用いておられる。神であるお方が世を救うために、人となってこの世に来られた「人間性と神性」が示されている。

イエスは「人」としては狐や鳥と比べて定住する家もない状態である。しかし「子(ホ・フィオス)」としては原語では特定のものを指す冠詞(ホ)がついているので、肉体をとられた神の子、世の救い主、さばき主を意味する。この言葉には「メシア」と違って政治的な先入観を持たれる危険性がない。それで、これ以後、しばしばイエスはご自分のことを「人の子」と表現しておられる。人の子イエスは世の救い主として来られたのに、この地上では枕

するところもない。まさにイエスの生涯は借りた家畜小屋に始まり、借りた墓に終わるものであった。イエスは神の国の福音を大胆に語ったために、世から憎まれ、枕するところもなかった。そして私たちの罪や病を負って十字架上で死ななければならなかった。それは私たちの身代わり、私たちの罪の贖いのためであった。イエスのこの十字架の贖いによって私たちは救われ、神の前に罪赦され、神の子とされた者として立つことができるのである。このイエス・キリストに従おうとする者は、誰でも自分本位な生き方を改め、万難を排して従って行く必要がある。

イエスの十二弟子たちもこの力あるイエスというお方に従って行けば、将来良い地位を得られると考えていた節がある。→マルコ10:35~41

やがてイエスがユダヤ人たちに十字架にかけられるために捕らえられると、弟子たちはみな逃げ去ってしまった。かろうじてシモン・ペテロだけは密かにイエスについて行くが、やがて三度もイエスを知らないと言うようになる。→マタイ26:58~75

しかし、やがて彼らは死より復活されたイエスにお会いし、心が開かれ、聖霊によって理解力が与えられた時、本当にイエス・キリストについて行くという意味が分かったのである。

今日では誰でもイエス・キリストを自分の救い主と信じる者には信仰の助け主、導き手なる聖霊が与えられている。しかし、やはりイエスに従って行くという努力、覚悟が必要なのである。→マタイ16:24~27

この律法学者はイエスに、どこにでもついて行きますと言う前に、まずキリストに従うには、どれほどの犠牲、どれほどの戦い、どれほどの十字架があるかをあらかじめ考えて覚悟すべきであり、イエスはそれを彼に教えたかったのである。この後、彼はどうしたのであろうか。

[21-22]「また、別の一人の弟子がイエスに言った。『主よ。まず行って父を葬ることをお許してください。』ところが、イエスは彼に言われた。『わたしに従って来なさい。死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。』」

これはイエスとその弟子の一人の会話である。ここでもイエスは厳しいことばを語られている。彼は今まで弟子としてイエスに従ってきたが、これからイエスが舟に乗ってしばらく休まれている間に、ひと走り家に帰って父の葬儀をしたいと願っている。けじめをきちんとする立派な心がまえだと私たちは考えるかもしれないが、しかし疑問もわいてくる。彼の父はつい今しがた死んだのであろうか。そんな父を残して今までのんきにイエスに従ってあちこちと行動していたのであろうか。葬儀の責任があったのなら、父親の看護の責任もあったのではないか。こう考えてくると彼の父は実際に亡くなっ

たのではなく、まだ生きているのかもしれない。実は彼の考えは次のようであつたかもしれない。

「今、イエスのおられるこのカペナウムなら自分の家も近い。しかし、イエスがガリラヤ湖の向こう岸に行き、さらにその先のどこか遠いところへ出かけられるとすれば、今はまず家にいる父の最後を見届けて葬り、肉親としての義務や義理を全部果たして、誰にも迷惑をかける人がいなくなり、反対したりする人がいなくなってから、後でゆっくりとイエスに従って行こう」

実際、当時の慣習として「父を葬りに行かせてください」という言葉は別れのあいさつであると考えられていた。こういう人に対するイエスの言葉は先ほどの律法学者とは正反対の「わたしに従って来なさい」であつた。これは葬式そのものが必要ないからとか、父を敬わなくてよいからとかいうことではない。葬式も家族への思いやりも必要である。ただ問題なのは、この人が家に帰り、父の死ぬまで元の生活に戻っている間に、今始めている弟子としての生き方が消えてしまわないだろうか、また父の葬りまでの長い期間が経ったとき、イエスに再び会うことができなくなるかもしれない。それゆえ、イエスはすぐにご自分に従うことを求められ、「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい」と愛もあわれみもないような言葉を語られた。しかし、誤解してはならない。ここでイエスが彼に言われたことは、「靈的に死んでいる人たちのことは、靈的に死んでいる人たちにまかせなさい」という意味で語られたのである。今あなたでなければできないことは何か。それは私について来ること、そして永遠のいのちのために自分自身を用いなさいということであつた。これは親不孝の勧めではない。今彼がイエスから離れていくな、彼も靈的な死人の仲間入りをするかもしれない。しかし、今彼が家族を離れてイエスについて行くことによって、やがて彼が福音の使者として帰って来る時に家族にも救いの手が伸べられることになるのである。イエス自身もその戸籍上の家族を省みず福音のための働きを続けられたが、最後には母マリアも弟ヤコブもユダたちも立派なクリスチャンとなって救いに入れられたのである。キリストに従う人は、この世の人々からは宗教かぶれの変人などとみられるかもしれないが、しかし、長い目で見る時、これこそまことの親孝行であり、キリスト者としてのあるべき生き方なのである。

私たちがキリストに従うということは、自分の生活の変革と罪の悔い改め、そして狭い門から入り、細く困難な道を行くという覚悟がいるということ忘れてはならない。しかし、最後に待っているのは永遠のいのち、神の国の門、光り輝く栄光の世界なのである。

私たちは自分のすべてを委ねて万難を排してイエス・キリストに従う者とならなければならない。